

恋するトマト〜クミンカナバー

2006(平成18)年6月27日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督=南部英夫/出演=大地康雄/アリス・ディクソン/富田靖子/村田雄浩/ルビー・モレノ/藤岡弘、/清水紘治 (ゼアリズエンタープライズ配給/2005年日本映画/126分)

……日本の農業問題・食糧問題は、都市問題・環境問題とともに深刻（なはず）だが、大っぴらに議論されることの少ないテーマ。そして、農家の跡取り問題も……。日本とフィリピンを股にかけた（？）テーマは「トマト」。そしてそのココロは、土と水と太陽。思いがけないラストはかなり感動的。農家の長男坊も元気を出して嫁取りの努力を続け、農業の仕事に誇りを持たなければ……。

農業問題と食糧問題に注目！

私は都市問題を弁護士としてのライフワークと位置づけて取り組んでいるが、この映画のテーマは農業問題と食糧問題。といっても、その切り口はさまざま……。そしてもちろんこの映画は、その問題点を整理し指摘するためのドキュメント映画ではなく、あくまで娯楽映画。したがってこの映画は、そういう重要な社会的テーマを根本に据えつつ、農家の長男坊とその両親の結婚に対する願望、そして女たちに振り回される中年男の悲哀と喜びを、涙と感動のストーリーの中に描いていくという珍しいもの。

この映画は、大地康雄が企画・脚本・製作総指揮・主演したのだが、実現するまでには実に13年間もかかったとのこと。

資金不足をはじめとするさまざまな困難を乗り越えて、良質な娯楽性を発揮しながら同時にこのような重要な社会的テーマをアピールする映画を完成させた努力に拍手！

農家の嫁不足はホントに深刻……

この映画の主人公野田正男（大地康雄）は、名峰筑波山を望む、霞ヶ浦周辺に広がる美しい田園地帯で、農家の長男坊として父親の跡を継ぐべく農業をやっているが、深刻な問題は、45歳になって今なお独身であること。というよりも、嫁が来てくれないこと……。

何度見合いを重ねてもダメなのは、決して野田の性格や顔が悪いからではなく、①農家であること、②長男であること、③農業を継ごうとしていること、それ自体が原因。したがって、問題の根は深い……。

私も新聞やニュースでそんな農家の実態は薄々感じていたが、これほど深刻だったとは、この映画を観てはじめて実感。そんな野田を励まし続けるのが勇作（藤岡弘）だったが、他方、和男（村田雄浩）はついに農業に見切りをつける決心を……。

罪深い女 その1……

この映画には、罪深い女（？）が2人登場する。その第1は、わが国を代表する清純派女優富田靖子演ずる景子。都会暮らしに疲れている景子は、田舎暮らしに憧れており、今は野田との見合いに続く交際も順調そう……。「今度は今までとは違う」「今度はホンモノだ」と確信した野田は、その喜びを勇作に打ち明け、結婚式場の予約をするとともに、勇作に司会を頼むという張り切りよう。このようにすっかり「その気」になっている野田は、あるデートの日、おみやげ用のすいかを箱に入れようとした栽培ハウスの中で「直接行動」に出ようとしたが、やんわりと「結婚まではダメ」と断られてしまいショボン……？ まあしかし、こんなことはよくあること……。

気を取り直して結婚式を楽しみに、日々の畑仕事に精を出していたが、ある日到着した手紙の中身は……？

もちろん景子に全く悪意はないのだろうが、ここまで期待を持たせた挙げ句、「よく考えましたが、やはり私には農家のお嫁さんはムリです……」はないだろう。だから、あえて私はこの景子も罪深い女の1人に数えた次第……。

罪深い女 その2 ……

罪深い女その2は、かつて週刊誌のグラビアをヘアヌードで飾っていたルビー・モレノ扮する、フィリピンパブで働く女性リバティ。飲み屋のホステスを蔑視するわけではないが、彼女たちの営業と本音の言葉を見分けることが難しいのは当然で、弁護士生活32年の私でも、今なおそれで悩むことが多い……？ しかしこのリバティは、飲み屋のホステスとしては珍しく(?)真面目で、「日本で結婚することができれば、一生懸命お父さん、お母さんのために尽くす」という今ドキの日本女性がまず言わない言葉を……。 「こりゃホンモノ」「たとえ国際結婚であっても、彼女がそこまで言うのであれば……」と考えた野田は、ついにリバティとの結婚を決意することに。

そして今日、野田はリバティの両親と会って、直接結婚の承諾をとるべく、リバティとともにフィリピンのマニラを訪問した。野田をやさしく迎えてくれたリバティの両親も農家。その家の中でリバティとの結婚の承諾をとり、当面の費用として、腹巻の中から取り出した200万円を両親に……。しかし、翌朝目を覚ました野田が目にした現実……？

農家の長男坊の末路はこんなにみじめ……？

純朴といえばそのとおり、真面目といえばそのとおり。水と土と太陽を相手としてお米や野菜をつくって毎日を過ごしている農家の長男坊は、もともと人を疑うという経験が少ないため、ハナから人を信用してしまうのが長所。しかし、時と場合によってはそれが大きな欠点に……。何と、昨夜あれほど楽しい時間を過ごしたはずのリバティの家は、今朝になるともぬけのカラ。家財道具もすべてなくなっているうえ、リバティはおろかりバティの両親も雲散霧消……？ 近くの農家のおばちゃんに聞くと、「あの小屋は前から空き家だったよ……」とのつれない返事……。

「こりゃ見事に一杯食わされた」「結婚詐欺で200万円ふんだくられてしまった」と気づいた時は、もはや後の祭……。リバティの出身地を聞き出し、1人必死にリバティを捜し回る野田だったが、有り金は底を尽き、今や日本に帰る気力も失

い、生きる希望すら失ってしまった野田は、フィリピンで浮浪者同然の「死に体」状態に……。

見事に変身、野田正男！

スクリーンは、突然1年後に変わる。これが映画の便利なところ。今や野田はパリッとした服装をして元気そうに働いているが、よく見ていると、あまりまともな仕事ではなさそう……？

『サンダカン八番娼館 望郷』（74年）は、九州・天草に住む、日本から東南アジアへ売られていく売春婦「からゆきさん」の姿を描いた名作だったが、今や日本へはフィリピンやロシア、韓国そして中国の東北地方などから、若い女性が大量に日本上陸……？ もちろん、正規のパスポートにもとづくサービス業での入国もあるが、そのうちの何割かは売春目的の人身売買や、それに近いケースであることは周知の事実……？ したがって、若くてキレイなフィリピン人女性を日本に送り込めば大金が転がり込むのは当然で、そんな商売がまかり通っているわけだ。

そんなブローカーの総元締めをやっている中田（清水紘治）に拾われた野田は、その商売で意外な才能を発揮していた。中田に言わせると、「こんな商売は野田のような純朴な男の方が信用されるから向いている」らしいが、たしかに誠心誠意サービスしている野田の姿を見ていると、ホントにそう思ってしまう。今や中田の野田に対する信頼は厚く、ナンバー2的な存在になっているが、野田くん、ホントにそれでいいの……？

やっとヒロインの登場！

この映画は126分と意外に長いが、それは前半の物語で約半分を占めるため。そして、ここでやっとこの映画のヒロイン、クリスティナ（アリス・ディクソン）の登場となるが、その出会いにもひと工夫、ふた工夫が……。

第1の出会い、野田が仕事の打ち合わせで来ていたレストランの中。ウェイトレスとして働くクリスティナの日本語が耳にとまった野田が少し話しかけるとともに、持っていたリンゴをプレゼントしたのがそれ。えらく気前のいい行動だ

が、これも純朴な田舎者特有の行動で、何の下心もスケベ根性も持ってなかったことは、私が保証しよう。

そして第2の出会い、こんな偶然があるから世の中は面白いし、この映画の骨格のストーリーを形成するもの。ある日、車を運転している野田が通りかかったのが、ラグーナの村。その美しい田園風景の中で一生懸命に稲刈りをしている人たちの姿にふと目をとめた野田は、思わず車を止め、霞ヶ浦周辺の田園風景を思い出しながらその姿に見入っていた。すると、稲刈りの手を休めて、野田に向かって大きく手を振ってきた麦わら帽子の娘は……？ さあここからが、この映画のメインストーリーの展開だ……。

やはり「額に汗する仕事」が1番……？

ホリエモン騒動や村上ファンド騒動によって、突然「マネーゲーム」に対して、「額に汗する仕事が1番……」という批判が強まってきたが、私はそのように批判する人たちがホントに「額に汗して働いている」のかどうかかなり疑問に思っている。むしろ私には、自分がマネーゲームに参加できず、また参加してもあれほどの「大成功」を収められなかった人たちが、やっかみ半分で批判しているように思えてならない。

しかし、野田はやはり45歳まで農家の長男坊として額に汗して働いていた男。今はフィリピン人女性を日本に送り込むことによって濡れ手に粟のような大金を稼いでいるが、もともとは田や畑での肉体労働が身体に染みついている男。思わず稲刈りを手伝うため、上着を脱ぎ、ズボンの裾をめくりあげて田んぼの中に入っていた野田には、農家の男としての本来の喜びが……。

そして、農家の父、母を手伝い、この田んぼを守りたいと本心から願っているクリスティナに対して、次第に熱い思いが……。

野田の人生の選択は……？

さあ、これから野田はどうするのだろうか……？ それはここではこれ以上書かないが、大きな選択肢としては、①中田のナンバー2としての仕事を辞めるのか否か、②クリスティナに対して結婚の申込みをするのか否か、③結婚をオーケー

ーしてくれたら、フィリピンに住むのかそれとも日本に帰るのか、という3つの問題点がある。もちろんこれらは、中田やクリスティナがどう対応するかによってその結論は大きな影響を受けるが、ここで1つ困ったことは、野田はクリスティナに対して自分の仕事を正直に打ち明けることができず、「貿易関係の仕事」とごまかしていたこと。「愛の告白」をするためには、まずウソをついていたことを謝らなければならないが、その勇気は……？そして、それに対するクリスティナの反応は……？それやこれやの映画のメインストーリーは、映画を観てのお楽しみに……。

『恋するトマト』とは絶妙のタイトル……

野田がクリスティナと最初に出会った時の小道具(?)はリンゴだったが、クリスティナやその家族と本格的な親交を深めていくについての小道具(?)はトマト。フィリピンでは小粒のトマト(プチトマト?)がメインで、日本でふつうに食べている大型のトマトは超高級品らしい。そこで野田は日本からその種を取り寄せ、まずは土を改良するところからその栽培に着手。そして、その成長とともに野田とクリスティナとの恋も、クリスティナの家族との親交も順調に成長していった。

しかし、トマトだって天候の影響をはじめ、取り入れまでにはさまざまな試練が……。それと同じように、いやそれ以上に野田とクリスティナとの間の恋にもさまざまな試練が……。さて、2人の「恋するトマト」は、それを乗り越えることができるのだろうか……？

2006(平成18)年6月30日記